

「上町台地から問う都心居住文化の創造とは」

弘本由香里(大阪ガスエネルギー・文化研究所 客員研究員)

はじめに

近年「都心回帰」、「都心居住」が注目を集めている。周知のとおり、バブル経済崩壊後の地価の下落等を背景に、大阪都心部でもいわゆるマンション建設ラッシュが続き、人口も増加傾向にある。

直近の二〇〇五年国勢調査(速報)における大阪市の人口総数は二六二万八七七六人で、五年ごとの国勢調査人口としては、一九六五年以降の人口増加に転じている。一年ごとの推計人口比で見れば、二〇〇〇年から既に増加に転じており、都心六区(北区、福島区、中央区、西区、天王寺区、浪速区)に限っていえば、さらに先んじて一九九五から増加に転じている。

二〇〇〇年と二〇〇五年の国勢調査比でも、引き続き都心六区は高い人口増加率を記録しており、一位中央区(二〇・七%)、二位西区(一四・五%)、三位福島区(九・三%)、四位北区(九・二%)、五位天王寺区(九%)、六位浪速区(七・九%)と、都心六区が並んで上位を占めている。都心六区の人口増加が著しい中でも、区域の半分以上が上町台地上にあたる中央区は突出した人口増加を示している。また、区域のほとんどが上町台地上にあたる天王寺区の人口増加も顕著であり、両区を合わせると一四・七%の増加率(二〇〇〇年～二〇〇五年)となっている。

かねて人口減少に危機感を抱き続けてきた大阪市にとって、近年の人口回復は一面大いに喜ばしい事態であるが、それが都心における居住の豊かさの形成と実質的に結びついていかなければ、都市の持続的な発展や再生を望むことはできないだろう。こうした認識のもとに、持続的に都市の活力とモラルを生み出し支え得る、都心居住文化の創造について、大阪都心部のうち、上町台地界隈の人口動向や近年芽生えてきた動きに着目して考えてみたい。

上町台地の歴史的位相から

上町台地は、大阪城付近を北端に大阪市内中心部を南北に背骨のように貫く細長い高台である(図1)。かつては古代大阪の水際線だった。西に広がる海を介して、東アジアを中心とする国際的なネットワークの拠点、政治・経済・文化の窓口として、歴史上重要な役割を果たしてきた。古代には四天王寺、難波の宮、中世には石山本願寺、近世には大阪城と、歴史を物語る数々のランドマークが、この台地上に存在している。

浄土信仰が盛んだった時代には、台地の上から極楽浄土を拝む「日想観」の聖地として、貴賤を問わず多くの人々が集まり、遠く西方に沈む夕陽に思いを馳せた土地でもある。近

世には台地の崖沿いに寺町が形成され、独特の景観文化を今に伝えている。

近代化の波に洗われて以降も、大阪の都心部にあって、商業・業務機能一色に染まらず、教育、文化、医療・福祉、宗教等々の施設が集積し、都心部では貴重な自然林や公園等の緑地に恵まれ、大阪における都心居住の適地としてのイメージを有している。実際、新規に供給されるマンションの広告には、上町台地上の学校や寺社や病院や、近年話題の長屋や屋敷を改修したショップやギャラリーなどの写真が散りばめられ、この地で暮らす魅力を語りかけるものが数多く見られる。

こうしたイメージに引き寄せられて上町台地の居住者となった人々の多くは、まずはそのイメージの消費者として上町台地の暮らしを手に入れることになる。しかし、イメージを消費する一方では、地域は疲弊の一途をたどりかねない。果たして新たな上町台地の居住者は、イメージの消費者から、生活創造、ひいては地域・文化創造の主体へと転化を遂げ得るのだろうか。地域のサスティナビリティとは、そのありようにかかっているともしえるだろう。



図1 上町台地界隈の位置図⁽¹⁾⁽²⁾から転載

四角で囲んだ部分が本稿で主な対象とする上町台地界隈

データで見る上町台地界隈の居住特性

都心居住の適地としてのイメージが先行する上町台地に、現実にはどのような居住の実情があるのか、全貌を掴むのは困難であるが、断片だけでも切り取って眺めてみたい。

二〇〇五年度、大阪ガスエネルギー・文化研究所による委託研究の一貫として、京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻居住空間学講座高田研究室（以下高田研究室）が、

中央区・天王寺区の居住特性を、GIS（地理情報システム）を用いて分析している⁽¹⁾。同調査結果を参考に私見を交え、まず簡単ではあるが上町台地界隈の居住の現状を捉えておきたい。なお、二〇〇五年の国勢調査データの詳報が未発表のため、人口の増減率については一九九五・二〇〇〇年の国勢調査データを、単独世帯率及び共同住宅率については二〇〇〇年の国勢調査データを利用している。

町丁目ごとの人口増減率の分布からは、中央区・天王寺区のうち、上町台地上の人口増加が明瞭であることが見て取れる。とりわけ、谷町筋、松屋町筋、長堀通り沿いで活発なマンション供給が行われていることが類推できる。

単独世帯率が高い大阪市（大阪市平均三九・六％、全国平均二七％）にあって、中央区・天王寺区の単独世帯率は市平均を遙かに上回っており、中央区で五一・八％、天王寺区で四二・七％に達している。区域の半分強が上町台地上にあたる中央区に対して、区域のほぼ全域が上町台地上にあたる天王寺区で単独世帯率が一割弱ほど低い点に、単独世帯率が極めて高い都心にあって若干ながら家族世帯の居住地として上町台地が選択されている傾向がうかがえると見ていいだろう。

また、共同住宅に住む世帯の割合を見ると、大阪市平均の六七％に対して、中央区が七三・二％、天王寺区が七一・七％と、都心居住のスタイルとして共同住宅居住が一般化しており、圧倒的なボリュームを占めていることがわかる。その中にあって、所々戦災を免れた長屋街など、共同住宅率が五〇％を下回る特徴的な地区が見られる現状もよくわかる。

居住特性から浮かび上がってくる課題

続いて、上記高田研究室調査によるGISを用いた中央区・天王寺区の町丁目ごとの単独世帯率と共同住宅率の分析結果に基づいた、四種類の地区特性（町丁目の類型）の抽出と、新設マンション（二〇〇一年～二〇〇四年）の特性に関する分析結果を紹介したうえで、私見を交えて、上町台地界隈の居住をめぐる課題を探ってみたい。

なお、地区特性の抽出に当たっては、際立った特性を捉えるために、単独世帯率五〇％、共同住宅率八〇％が基準値として採用されている。共同住宅率八〇％以上かつ単独世帯率五〇％以上の地区を「エリア1」、共同住宅率八〇％以上かつ単独世帯率五〇％未満の地区を「エリア2」、共同住宅率八〇％未満かつ単独世帯率50％以上の地区を「エリア3」、共同住宅率八〇％未満かつ単独世帯率五〇％未満の地区を「エリア4」としている。

まず、同調査を元に同研究室の藤田清一郎氏が執筆した修士論文⁽²⁾から各エリアの特性に関する記述を抜粋し紹介する。

《【エリア1】（共同住宅率八〇％以上かつ単独世帯率五〇％以上の地区）： 共同住宅に単独世帯が比較的多く居住する地区と考えられ、「子育てや子供の教育」を媒介にしたコミュニティの形成が難しく、居住者自身の参加意思が地域の関わりには必要である。また、分布としては上本町駅周辺など、鉄道や地下鉄の主要駅や中央区の幹線道路に沿って分布する傾向が見られる。このエリアに住む居住者は、立地の利便性を重視していること

が考えられ、特に松屋町筋以西では、民間賃貸の共同住宅が多く、定住意識が他のエリアに比べて低いであろう生産年齢の単身者が多く居住していることが予想される。

【エリア 2】（共同住宅率八〇%以上かつ単独世帯率五〇%未満の地区）：共同住宅に居住する核家族世帯が比較的多いエリアである。近年見られる区分所有型集合住宅建設の増加傾向から、さらに転入層が流入してくることが考えられる。また、若年齢者をもつ核家族世帯の「子育てや子供の教育」に関する地域活動への潜在的参加意思が想定される。分布としては幹線道路とはそれほど関連性をもたず当該二区に散在する形で分布している。

【エリア 3】（共同住宅率八〇%未満かつ単独世帯率五〇%以上の地区）：一戸建てまたは長屋建ての住宅に単身者が比較的多く居住するエリアで、単身高齢者が都心に残っているケースが考えられる。分布を見てみると、松屋町筋から西側のエリアに偏っており、また幹線道路沿いに散在する形で見られる。

【エリア 4】（共同住宅率八〇%未満かつ単独世帯率五〇%未満の地区）：一戸建てまたは長屋建ての住宅に核家族が多く居住する、低層の住宅が並ぶエリアである。そのため、水平型のコミュニティが依然として残っている、または成立しやすいという特徴を持つ。その分布は、エリア 2 とは対照的に、主要駅からある程度距離がある幹線道路から少し入り込んだ住宅地が中心であるため、それほど共同住宅建設が進んでおらず、比較的閑静で居住地環境としては良好な地域である。》

また、上記の地区特性に、二〇〇一年から二〇〇四年にかけて中央区・天王寺区に建設された七階建て以上のマンション九四棟のデータ（不動産経済研究所）を加えて、その特性をかなり大雑把ではあるが次のように捉えている。「近年建設されている新設高層集合住宅建設の傾向として、供給対象の家族類型によって、大きく次のような傾向があることがわかった。職住近接型のライフスタイルを望む単身者向けの集合住宅が中央区西部の業務地区東部に分布しているという傾向と、核家族向けの比較的占有面積の広い集合住宅として、幹線道路沿いには大規模かつ高層のものが、幹線道路から内部のエリアには中規模かつ中層の集合住宅が建設されているという傾向である。」^(藤田) (図 2~4)

上記の分析から、次のような課題を確認することができるのではないだろうか。まず、幹線道路や主要駅を軸に利便性優先で形成されていくマンションの集積と居住者の集積を、まちとの連続性という文脈からどう捉え直していくかという問題。次に、水平型の既存コミュニティが比較的温存されていると思われるエリアで新たに立地するマンションと既存コミュニティの関係性をどうつくりあげていくかという問題。新設マンションは、商業・業務に利用されていたビルの跡地に立つものが多く、急激に進む土地利用の変化のダイナミズムをまちとしてどう受け止め、再構築していくかという大きな問題が同時に横たわっている。これらの問題にどう向き合い、上町台地界隈を持続的に発展可能な真の意味での都心居住の適地とすることができるかどうか。居住者、ディベロッパー、行政等、まちづくりに関わるステークホルダーそれぞれに問われているといってもいいだろう。

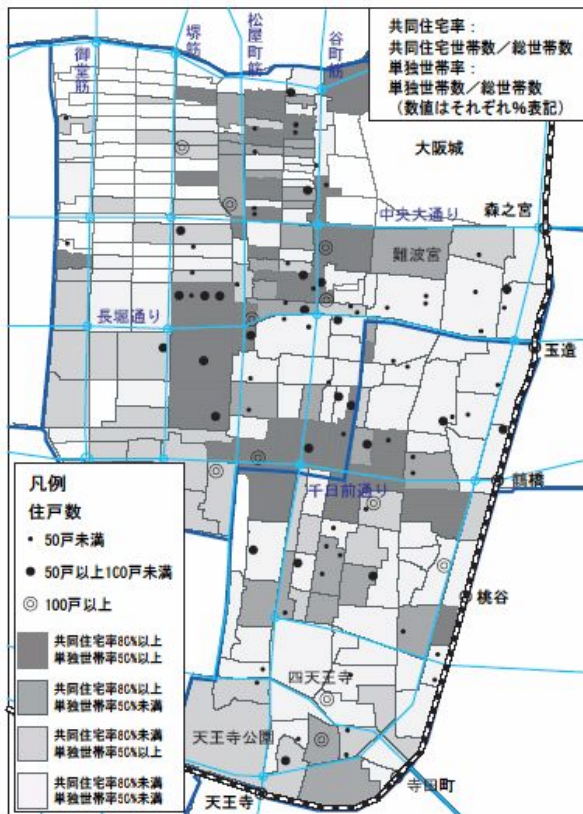


図2 中央区・天王寺区の1～4のエリアと新設高層集合住宅の規模⁽¹⁾⁽²⁾から転載

松屋町筋以東が上町大地界隈

共同住宅率・単身世帯率は2000年国勢調査、新設高層集合住宅データは2001年～2004年不動産経済研究所調査から。

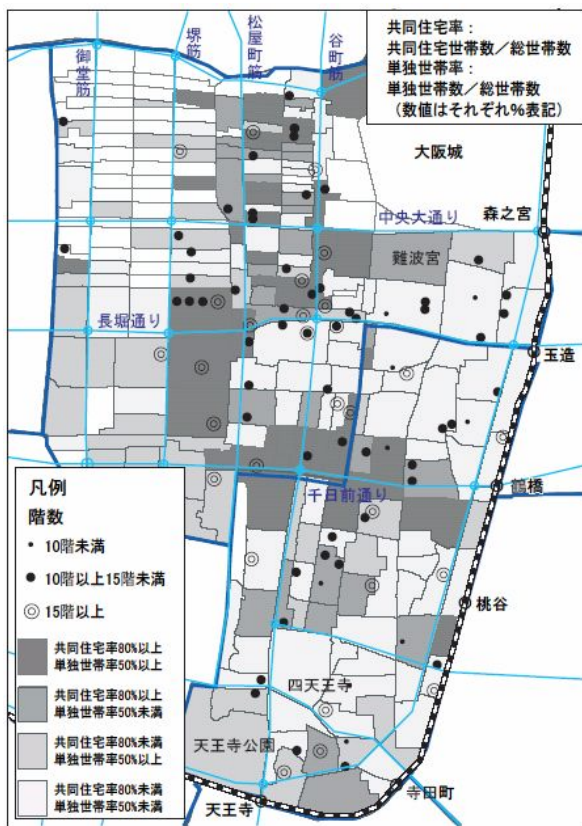


図3 中央区・天王寺区の1～4のエリアと新設高層集合住宅の階数⁽¹⁾⁽²⁾から転載

松屋町筋以東が上町大地界隈

共同住宅率・単身世帯率は2000年国勢調査、新設高層集合住宅データは2001年～2004年不動産経済研究所調査から。

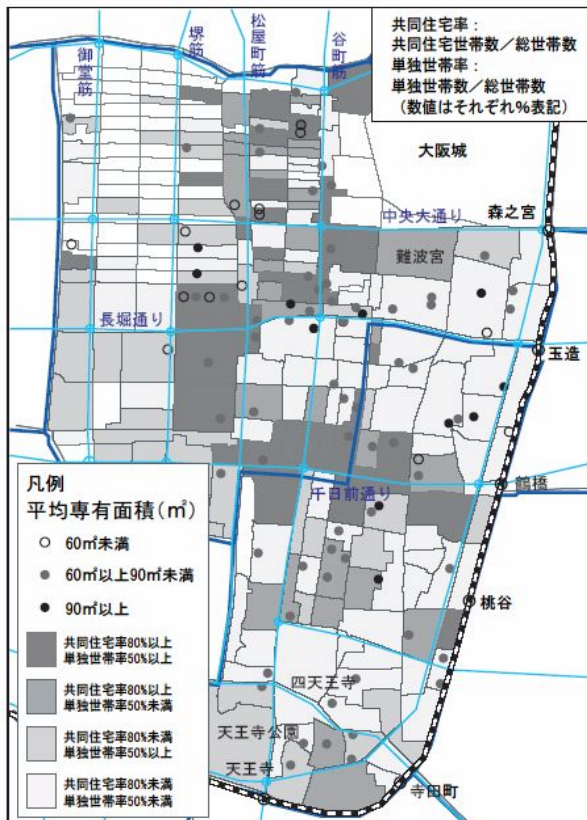


図3 中央区・天王寺区の1～4のエリアと新設高層集合住宅の平均占有面積⁽¹⁾⁽²⁾から転載

松屋町筋以東が上町大地界隈

共同住宅率・単身世帯率は2000年国勢調査、新設高層集合住宅データは2001年～2004年不動産経済研究所調査から。

都心居住の価値とは何か

そもそも都心居住のスタイル、都心居住の文化とは何なのか。移動に便利な都心に住みさえすれば、都心居住のスタイルや文化を実現しているといえるものでもないだろう。

都心居住を支える計画・政策の研究者である高田光雄氏（京都大学大学院工学研究科教授）は、「都心居住とは“いえ”に住むのではなく、“地域資源の活用”や“地域内外の他者との交流”を通して“まち”に住むことである」と説いている。その際の「地域資源の活用」とは、「個人が、人・物・情報・風土などの蓄積、すなわち“まち”の資源を有効に活用し、自らのライフストーリーを実現していくこと」であり、「他者との交流」について「個人は、“まち”に住み、集うさまざまな価値観を持つ他者と、地域資源を介した交流を持つことで、新たな価値を発見する」としている。地域資源を介した他者との交流自体は、都心以外でも行われることであるが、資源の集積性・多様性と居住者の流動性の高さが都心の大きな特徴であるといえるだろう。

経済の中心地として資源消費をもっぱらとしてきた都心部に、生活・文化の論理を再導入すると、都市の持続的な発展、新たな価値の創造や地域の課題解決を可能にしていく取り組みこそが、都心居住の目指すべき方向性であり価値であると考えてよいだろう。

上町台地に目覚めつつあるもの

上記のような都市的課題と歴史的文脈を背景に、住宅というハード分野からよりも、むしろ生活・文化というソフト領域から、都心居住文化の創造にリアルに迫り得る動きが生まれつつある。キーワードは、「長屋再生」「アート・オブ・ライフ」「コモンズ」「人権」「多文化共生」など…。以下に代表的な例を簡単に紹介しておこう。

上町台地上で、都心ながら戦災を免れ、大阪らしい商店街と長屋に、路地が張り巡らされた、懐かしい暮らしの風景が残る、空堀商店街界隈(中央区)で注目を集めているのが、「空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト(からほり倶楽部)」である。時を経た長屋や屋敷の価値の継承と、新・旧文化の融合を可能にする、内発型・持続型のコミュニティ・ビジネスのありようを模索しながら、地域の活性化に果敢に取り組んでいる。長屋再生複合ショップ「惣」や屋敷再生複合ショップ「練」等の具現化とともに、長屋ストックバンクネットワークを立ち上げ空物件の流通を手がける。また、長屋と路地のまちを舞台したアートイベント「からほりまちアート」を毎秋開催。二日間で一万人を超える来街者を集め、地域に暮らす人々が、まちに対する誇りや自信を回復する機会にもなっている。

江戸時代以来、数々の寺院が薨を連ねる寺町(天王寺区)の一角では、劇場型の本堂ホールや研修室、オープンスペース等を有し、演劇やコンテンポラリー・ダンス、コンテンポラリーアートや詩の朗読、箱庭療法等々、多様な表現活動をインターフェイスに、個と個、個と社会の新たな関係づくり、コモンズ(公共価値)の再生に取り組む寺院「應典院」と「應典院寺町倶楽部」がある。また、一心寺の呼びかけで寺町一帯の寺院等が実行委員会を結成し、春の一日境内を会場に、いっせいに門戸を開いて開催する「なにわ人形芝居フェスティバル」も、既に地域恒例の行事に育っている。

天王寺区から生野区へ足を伸ばすと、社会的マイノリティが誇りを持って生きる社会づくり、人権教育に力を入れた活動を展開する「コリアNPOセンター」の存在がある。在日コリアン自身が当事者として物語る歴史・文化・記憶の継承と、コリアタウンを舞台に、多文化共生への理解・共感を広げる体験プログラムは、修学旅行や研修のプログラムとして各地の学校で採用されている。全国の若者たちとコリアタウンをつなぎ、大阪だからこそ体験・学習できる文化資源の一つともなっている。

上町台地をめぐる数々の拠点の魅力を、広く発信していきたいと思い立った若者たちのグループもある。「上町台地活性化NPO 西代官山クラブ」である。まちの歴史・文化スポットを回遊しながら、お店でお茶や食事や買い物も楽しめるようにと「上町台地を遊ぼう!」マップを発行。また、レンタサイクル「うえまち貸し自転車」事業やコミュニティ・ツアーのコーディネイトやガイドも手がけている。

こうした、上町台地の歴史・文化と密接に関わりながら芽生えてきた“市民の知”ともいべき活動資源を、上町台地という場所性に立脚しながら結び合わせていくことで、より力ある知へと育てていくことができるのではないか。そんな思いを共有する、上記の活動団体・拠点地域の関係者や、大学の研究者等が集まって、二〇〇三年五月にはネットワーク組織「上町台地からまちを考える会」も誕生している。同会が目指しているのは、まさ

に「都心に生き会う価値を見つける」こと「都心居住の真価を問う」ことであり、ネットワーク組織の特性を活かしながら、流動性の高い都心における、人とまちの豊かな関係性の再構築に向け、地域資源の力、コミュニティの力、市民の力をいかにエンパワーメントしていくか、試行錯誤を積み重ねつつある。実践と理論をつなぐ取り組みがその特徴であり、前述の高田研究室による調査も同会との協力関係のもとに実践されている。

重層的なネットワークの広がりを力に

こうした動きと並行して、大阪市の住宅施策「マイルドHOPEゾーン事業」も動きだしている。上町台地のうち、大阪環状線の内側約九〇〇ヘクタールを都心居住のリーディングゾーンと位置づけ、魅力ある住宅地づくりに取り組むNPO等と協働で、住むまちとしての大阪の文化を創造・発信していこうというものである。二〇〇五年一二月にキックオフイベント「住むまち・上町台地フォーラム」が開催され、同地域で活動を展開している二三団体が一堂に会し、互いの取り組みやこれからのまちづくりについて語り合った。今後参加団体の拡充や専門家によるサポートの枠組みを形づくりながら、具体的な事業が検討されていくこととなるだろう。

個々の団体の活動に始まり、高次のミッションを共有し得る団体間のネットワークの形成、そして政策と連動した協働事業の展開へと、多様な主体による取り組みが上町台地上で重層的に柔軟に連動し広がりを見せつつある。このダイナミズムを活かして、上町台地が直面している、土地利用の変化、マンション立地と既存コミュニティをめぐる諸問題を克服し、上町台地の歴史・文化の文脈の上に、新たな都心居住文化を創造していく力としていきたいものである。

- (1) 大阪ガスエネルギー・文化研究所委託研究「上町台地界限におけるサステナブル・都心居住に関する調査研究報告書」(京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻居住空間学講座高田研究室、二〇〇六年二月)
- (2) 藤田清一郎「新設高層集合住宅居住者の地域資源と地域活動への関わりに関する研究--大阪市と深部を対象として--」(京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻居住空間学講座修士論文、二〇〇六年二月)